

令和4年度(2022年度)筑波学院大学 入試日程

筑波学院大学では、目指す未来で選ぶ2つのコースがあります。出願時に、希望のコースを選択します。ILAへコースを選択された場合でも、選考の結果、総合コース合格となる場合があります。

国際リベラルアーツ(ILA)コース

英語を卓越した水準にまで高め、国際的視野を広げることで世界で活躍できる人材の育成を目指すコースです。英語集中プログラム、海外名門大学留学、英語での専門科目受講により、英語で考えられる、英語でディスカッションやプレゼンテーションができる、確かな英語力を身に付けます。このコースへの入学は、英検準2級程度以上の英語力が目安です。

総合コース

多彩な専門分野が学べる本学の強みを生かし、専門性を高めることで、一人ひとりの学生が独自の強みに磨きをかけられるコースです。リベラルアーツ教育とアクティブラーニングを通して自分の考えを発信し、主体的に解決できる思考力を育みます。

入試区分		出願期間(消印有効)		試験日	合格発表日
学業特待生 選抜	2期	1月17日(月)～1月28日(金)		2月5日(土)	2月11日(金・祝)
	3期	2月14日(月)～2月25日(金)		3月4日(金)	3月11日(金)
一般選抜	1期	1月17日(月)～1月28日(金)		2月5日(土)	2月11日(金・祝)
	2期	2月14日(月)～2月25日(金)		3月4日(金)	3月11日(金)
入試区分		エントリー期間 (消印有効)	面接日	出願資格認定通知	合格発表日
				出願期間 (消印有効)	
総合型 選抜	5期	1月25日(火)～2月8日(火)	2月15日(火)	2月18日(金)	3月11日(金)
				2月21日(月) ～3月3日(木)	
	6期	2月16日(水)～3月2日(水)	3月9日(水)	3月11日(金)	3月18日(金)
				エントリーシート と同時に提出	

私費外国人留学生総合型選抜

日程	エントリー期間	試験日	出願資格認定通知	出願期間 (窓口受付のみ)	合格発表日
D日程	1月11日(火) ～1月21日(金)	1月29日(土)	2月4日(金)	2月7日(月) ～2月18日(金)	2月25日(金)
E日程	2月7日(月) ～2月18日(金)	2月26日(土)	3月4日(金)	3月7日(月) ～3月15日(火)	3月18日(金)

日程や内容は変更となる場合がございます。詳細は筑波学院大学公式LINEにて随時公開中! ▶▶▶



『つくば21C教育フォーラム』を読みませんか?

筑波学院大学21世紀型教育研究所は、研究所報『つくば21C教育フォーラム』を季刊で発行しています。本学をはじめ高校での先端的な教育への取り組みをご紹介します、教育関係者の皆様のご参考にしていただけるよう、茨城県内だけではなく県外の高校にもお送りしています。高校関係者の方々で、送付をご希望の方には対応させていただきます。本学入試グループ(nyushi@tsukuba-g.ac.jp)までご連絡ください。

発行：筑波学院大学21世紀型教育研究所
発行日：2022年1月
住所：〒305-0031 茨城県つくば市吾妻3丁目1番地
電話：029-858-4811(代表)

つくば21C教育フォーラム

筑波学院大学21世紀型教育研究所報

第4号

つくば21世紀教育フォーラム特集

対談

つくば市長

筑波学院大学理事長

筑波学院大学学長

五十嵐 立青・橋本 綱夫・望月 義人

茨城県立筑波高等学校 校長 茂呂 輝夫

キャリア開発を目指した県立高校の教育実践
―地域との関わりを深める「つくばね学」の取り組み―

情報・デザイン専攻学生インタビュー

あなたはここで何を学ぶ?

聞き手:高嶋 啓 筑波学院大学 教授

筑波学院大学

授業研究会報告(第5回～第7回)



つくば21世紀教育フォーラム特集

対談

五十嵐 立青 つくば市長

橋本 綱夫 筑波学院大学 理事長

望月 義人 筑波学院大学 学長

つくば市が望む大学教育とは

つくば市は2019年から2020年にわたり、市長、教育長、教育委員を構成員とする「総合教育会議」を十数回重ね、「つくば市教育大綱」を策定。「一人ひとりが幸せな人生を送ること」をつくばの教育の最上位目標としました。今回の対談では五十嵐立青・つくば市長を迎え、つくば市が目指す教育と、つくば市唯一の私立大学である筑波学院大学に求める教育像について話を伺いました。

コロナ禍でも「学びを止めてはいけない」

望月: 2020年春に新型コロナウイルスの感染が拡大が続いていることをうけ、全国の小中学校と高校を臨時休校とするよう政府が要請しましたが、つくば市は休校措置を取りませんでした。改めて、当時のつくば市の判断をどう評価されますか。

五十嵐: 政府の要請がどういうものなのか、きちんと文書で確認したうえで、基本的に、あのタイミングでつくば市内全校が休校となったら何が起こるかを考えていました。先行して、北海道で一斉休校をした時、子どもの休校で職場に行けない医療従事者が多くいたため、医療機関で受診制限が起こったという情報を得ていました。つくば市内は医療従事者が極めて多いです。一斉休校をすれば現場で頑張っている医療従事者やエッセンシャルワーカーの皆さんが困り、社会が機能しなくなります。そこで、つくば市はまず1週間の準備期間を取り、そこから休校を行いました。さらに、やむを得ない状況であれば学校に来ることができ、給食がセーフティネットになっている児童・生徒たちがいるので給食も提供しました。福祉的な役割も持つ学校を急に止めてしまっただけでは問題だろうという判断でした。

望月: 保護者からは「神対応」と評価されましたね。非常に印象的でした。

教育は、子供たちの幸せな人生のために

橋本: つくば市は2020年3月、「つくば市教育大綱」を策定しました。「世界のあしたが見えるまち」、「誰一人取り残さないつくば」を実現するため、つくば市が目指す公教育の方向性を教えてください。

五十嵐: 国内の若手リーダーの会合に出席した時、非常にショックだったことが、自分の子どもたちを公教育を行う学校に行かせようとしていないことでした。「なぜなの?」と聞いたら、「自分が辛かった」「枠にはめられる」と言うんです。そこで、これまでの学びではだめだろうと考え、つくば市は近代公教育から大きく転換することを宣言しました。それは

これまでの教育から「主語を変える」ことだと考えています。

橋本: 具体的には、どういったことでしょうか。

五十嵐: 主語を「教える側」から「学ぶ側」へ移すことにより、教育のアプローチを根本から変えるわけです。具体的には「『教え』から『学び』へ」「『管理』から『自己決定』へ」「『認知能力偏重』から『非認知能力の再認識』へ」の3つの転換を掲げています。今までは教室で先生が一生懸命語ることが教育でしたが、主語が生徒に変わります。また、校則などでルールを全て決めるのではなく、周囲の大人は子どもを信頼し、子どもが自己決定することをサポートすべきでしょう。「『認知能力偏重』から『非認知能力の再認識』へ」というのは少し難しいですが、点数化できないような能力がこれからは必要になっていくので、偏差値で測れない「やり抜く力」や「仲間と協力する力」など非認知能力を養う教育に転換しようということです。

橋本: 非認知能力の必要性は、私も非常に感じています。

五十嵐: 何のために公教育を転換するのか、ということがさらに大事です。私は、教育は子どもたち自身が幸せな人生を送るためにあると思っています。その先にイノベーションや成長があり、日本の世界的地位の高まりがありますが、大人や政治の目線ではいけません。その主従関係は間違わないようにしたいと思っています。

橋本: 実際には、一人一人のミクロの積み上げで社会は成り立っていくわけですね。

どこにも行けない子どもを作らない社会

橋本: 「つくば市教育大綱」策定の際に、新しい教育(オルタナティブ教育)の一つである「イエナプラン」を見に行かれたと伺いました。そのようなオルタナティブ教育を導入したいとお考えですか。それとも、公教育全体を変えていくという考えなのでしょうか。

五十嵐: 公教育全体を変えていくことを考えています。イエナプランを導入することが目的ではなく、イエナプランの精神を「つくば市教育大綱」にどう取り入れるかが大切です。

視察で特に驚いたのは、イエナプランが盛んなオランダでは、不登校が全国で数十人レベルだということです。公立学校に通えなかったら別の選択肢、というように自分に合うスタイルを選べ、どこにも学びに行けない子を作らない仕組みとなっています。それは本当に豊かな社会ですね。

いきなりそのレベルは難しいですが、つくば市ではそのような社会を目指し、不登校の対策に力を入れています。これまで行政の不登校支援は「適応指導教室」という名の下で行われてきました。既存の学校の枠に適応できていない子を指導し直していく教室、という意味です。しかし、そんな言葉遣いはやめよう、大人たちが考えた枠組みに適応させるという考え方もやめよう、と、名前を変えました。現在は、不登校の生徒を学校に戻すことをゴールにしているわけではなく、学外のフリースクールや校内のフリースクールなどいくつかの段階を経て、手厚く選択肢を作り、学校という場所に来なくても学び続けられる環境づくりに力を入れたいと考えています。

大学で多面的立体的に見る方法論学んだ

橋本: 多様な子ども達に合った、様々な学びの場を用意しているんですね。

「つくば市教育大綱」において「『教え』から『学び』へ」など、「つくばで目指す教育の考え方の転換」が示されています。つくば市で唯一の私立大学、筑波学院大学が目指すコンピテンシー（高い成果につながる行動特性などの資質・能力）を志向する教育と共通する考え方だと受け止めていますが、この「つくばで目指す教育の考え方の転換」は高等教育にも必要とお考えでしょうか。

五十嵐: 間違いなく同様だと思っています。「つくば市教育大綱」は、子どもたちだけでなく、未就学児から生涯学習・高齢者まで含めてこうありたいと考えている学びの環境を示していますので、どういうコンピテンシーが必要かと考えていくことはとても大切だと思います。

私にとって大学は、多面的立体的に見る方法論を教わった場所でした。知識は自分でも身につけられますが、方法論を構造的に手に入れられる場所というのは、そうありません。大学の一つの存在意義だと思います。

橋本: 筑波学院大学はグローバル時代に対応した大学教育として、2021年度からILA（国際教養）コースを新設し、語学以外でも外国人教員を中心として英語だけの授業を展開しています。「世界のあしたが見えるまちづくり」を掲げる市長は、「国際性」というキーワードにおいて、筑波学院大学にどのような役割を期待されますか。

五十嵐: 学生が世界への視座を持つことも大事ですが、

同時にローカル(地元)を知り、ローカルでの活動をしていることが大切だと思います。現在、つくば市では、140カ国10,000人くらいの外国人が生活しています。国籍数では大阪が一番多いようですが、人口密度での外国人比率はつくば市が一番。この狭いエリアにこれだけの多様性がある街というのは、やはり珍しいんじゃないかと思います。この小さな世界都市を、学生にとって、言語を含めた様々な実践の場にいただけたらと思います。

橋本: 地域の国際性にも目を向けながら学びを深める、ということですね。

五十嵐: つくば市内には外国にルーツを持つ子どもがたくさんいて、日本語の支援が非常に重要な課題です。これまで筑波学院大学が精力的に「こども日本語指導者研修会」に関わってくれたり、学生がプレスクールやプレクラスでつくば市の外国人支援を非常に熱心に行ってくれたりしたのは、とてもありがたいことでした。また、「世界お茶のみ話」にも筑波学院大学の学生が参加してくれました。おそらく、そういう活動をしていただくことが学生たちにとっても大事なのだらうと思います。

筑波学院大の知見を市民向けに生かして

橋本: 筑波学院大学はつくばショートムービーコンペティションやつくば4Tプロジェクト(つくば市、筑波大学、筑波技術大学、筑波学院大学の合同プロジェクト)など、つくば市と共に地域貢献活動を行ってきました。現在は経営資源の見直しで一部縮小していますが、復活を予定しています。今後の筑波学院大学に求められるつくば地域との関わりについての考えをお聞かせください。

五十嵐: 現在、つくば市の「第2次つくば市グローバル化基本指針策定懇話会」へ、筑波学院大の先生に参加いただいています。また、以前は貴学の先生方が市民向けの公開講座をやってくれていましたので、ぜひまたお願いできればと思います。

また、去年の一斉休校の時、つくば市では「つくばSTEAMコンパス」という取り組みをスタートしました。子ども達が興味関心を持ったテーマについて自分で研究計画を作り、投稿すると、つくば市内でリアルに第一線で活躍する若手研究者がコメントをしてくれる、という仕組みです。筑波学院大学の様々な先生方にも関わっていただけるとありがたいですね。

橋本: とても面白いですね。私も大学は、地域の中の存在であると同時に、生徒にとっては学び自分を育てていく場でもあります。つくば市唯一の私立大学として、真摯に教育へ向き合っていきたいと思います。本日は、ありがとうございました。





池の再生(小田地域まちづくり振興会)

キャリア開発を目指した県立高校の教育実践 ー地域との関わりを深める「つくばね学」の取り組みー

茨城県立筑波高等学校 校長 茂呂 輝夫

「つくばね学」の誕生

筑波山のふもとに位置する筑波高校の北条地区は2012年5月6日、突然の竜巻により甚大な被害を受けた。自動車は宙を舞い、信号や電線が倒壊し、あたりは瓦礫が散乱した状態となったのである。特に、神社や一般家屋は倒壊し、5階建て雇用促進住宅の窓から家財道具が飛び出す有様であった。学校も体育館の窓ガラスが割れるなど、多少の被害を受けた。復旧工事後に学校は再開したが、その時に学校近隣の被災家屋、公園、道路などの片づけを生徒が自主的にボランティアとして手伝ったという経緯がある。そこで、この災害を契機として、生徒と地域との関わりが始まっている。

筑波高校では、学校活性化を目指し、地域の人たちとの連携を体験的地域学「つくばね学」と位置づけ、



農業体験(武平ファーム)

2016年度より6年間実践を進めてきた。県下で初めて実施された地域連携事業は、現在も受入れ団体と新型コロナウイルス感染拡大防止に努めながら運営を進めている。

主な実習先として、地元の小学校、

幼稚園、保育所、大学（筑波学院大学）、福祉センター、地域交流センター、個人農園、農業法人、製麺所、古民家や歴史的建造物、地元伝統芸能団体などでの活動があげられる。毎年、2年生の1学期は学校での座学（事前研修）を受講し、2年生の2学期から3年生の1学期までの1年間の実習を行っている。毎週金曜日、午後2時間の総合的な学習の時間（2022年度より総合的な探究の時間）をあてて実施している。

実習内容に関しては、地域に貢献する高校生の育成という「つくばね学」の趣旨に基づき、各事業所がすべて企画立案を含めて任されている。具体的には、製造や収穫、イベント準備や片付け、子供たちへの支援、伝統芸能の練習や工芸品の創作、歴史的建造物の清掃作業など多様な活動を行っている。

筑波学院大学との連携

地域体験学習である「つくばね学」の講座の1つとして、高大連携協定を締結したことにより、2019年度の高校入学生から筑波学院大学にて、大学教員の講義を受けることが可能となった。一期生である高校2年生は2020年の2学期から、3年生の2021年1学期にかけて約1年間、毎週金曜日の午後、筑波学院大学にて様々な講義を受講し、「つくばね学」として単位認定（学校外学修単位認定）された。その講義内容は、筑波学院大学教員による「グローバルコミュニケーション」「情報デザイン」「メディアデザイン」などを実施しており、高大連携事業として県内でも極めて画期的な取り組みと

筑波学院大学での「つくばね学」講義



経営学「心理学を会社経営に活かす」（筑波高等学校にて実施）



情報・デザイン「情報数学について」



情報・デザイン「Webアプリケーションを使用したデザイン制作」



人文科学「映画と文化」

して注目されている。特に、地域社会だけではなく、研究学園都市つくばにある大学とのつながりを深めることにより、生徒のキャリア開発に期待が持たれている。なお、2021年10月（コロナ禍の臨時休業のため1ヶ月遅れの開始）より二期生にあたる筑波高校生が筑波学院大学にて受講を始めている。その二期生の1回目の講義では「情報数学で、入口と出口の線があると一筆書きが出来るが奇数では出来ない」、2回目の講義では「FigmaでのUIデザイン体験をした。インターフェイス、ウェブデザインなどの言葉を知った」などの感想があり、高校生の関心意欲の向上を示す意見も多く聞かれた。今後も筑波学院大学でのアカデミックな学びを通して、生徒の適切なキャリア形成が十分に期待できる。

「地域探究学科」を目指して

このような教育実践の流れの中で、筑波高校は地域の人たちとのより一層の連携を目指し、地域の課題解決をともにに行いながら、「つくばね学」を進めていく必要がある。まず、短期的には、つくばね学の教育的効果の分析、教育事業として受入れ団体からの詳細なフィードバックを得ること、さらには、教育事業としての改善を目指し、関連する教員同士のディスカッションや研修といったことを実施していかなければならない。長期的なビジョンとしては、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の導入を検討することも必要であろう。地域の課題解決を生徒が地域の人たちと協働して進め、お互いに成長していく姿は学校の将来像としてふさわしいと考えられる。さらに、

筑波高校においては地域と連携した事業がさらに充実するために普通科の学科改編によって地域探究学科となり、併せて適正規模の高校に生まれ変わることに、学校改革を進めていくことが期待されるであろう。



松葉の収集(矢中の杜)



●作品へのこだわり

高嶋: 2021年6月に行われた第7回大型タペストリーコンペティションでは、150人の市民の方の投票によりお二人の作品が優秀作品として選ばれました。今回の受賞作について、それぞれコンセプトやこだわりを聞かせてください。

猫塚: 今回制作したのはタペストリーなので、布が飾られて揺れるところを想像して、くらげがゆらゆらしているイメージで作りました。また、夏に飾られることを意識し、海の青い色を使って全体的に涼しく感じられるようにしました。濃すぎも青すぎもしない絶妙な色合いになるよう、こだわりました。

片岡: 私は朝顔の絵をタペストリーにしました。最初のデザインは朝顔をアップにして平面的にしていたのですが、タペストリーの配置などを考えながら、もっと奥行き感を出して空間を生かせるようなデザインを、と心がけました。

●見られることを意識して

高嶋: 教師やクラスメートではなく一般の方に審査されるということは、作品を制作する上で何か影響がありましたか？



片岡 心苑(明秀学園日立高等学校)

片岡: 多くの人に見てもらわねなので、単に自分が作りたいものを作るのではなく、より多くの人に関心を持てるようなデザインってなんだろうな、と考えながら制作しました。

猫塚: いろんな人を選ばれたら自分の自信につながるから、いつもよりがんばろうと思いました。自分の作品がどんな人にも認められるのかな、と気になりました。

高嶋: 制作にあたっては、事前に展示場所を見に行っておもない空間を確認したり、ショッピングモールのお客さんの雰囲気や調査したりして、作品を見てくれる人のことを意識しながら作業を進めました。実際に自分の作品があんなふうに大きく展示されて一般の人に見ていただいて、どう思いましたか？

猫塚: 自分がこだわった涼しさとか癒しなどをお客さんたちが感じてくれたかどうか、気になりました。作品が大きくてとても細かいところまで見えるから恥ずかしかったです。

片岡: 評価されることは緊張もあるし不安もありますが、自分の作品を見てもらえるということはいい経験だと思いました。作品の大きさについては、見れば見るほど自分の作品の粗さが見えてくるのがちょっと・・・。



あなたはここで何を学ぶ？

(聞き手: 高嶋 啓 教授)

本学のメディアデザイン系の授業では、地域と連携した作品制作を積極的に行っています。授業で手掛けた作品がショッピングセンターで行われたコンペティションで見事優秀賞に輝いた2名の学生に話を聞きました。

●人に理解される作品作りを

高嶋: タペストリー以外にこれまで授業で制作したものについて、教えてください。



猫塚 美友紀(下妻第二高等学校)

猫塚: つい最近まで、公園の禁止サイン(案内板)を制作していました。遠目に見てもわかるように、線を太くして動きがわかりやすくなるよう心掛けました。

片岡: 私も同じ授業で、禁止のサインを作りました。ぱっと見てわかりやすい、伝わりやすい表現を意識して考えるようにしています。

高嶋: サインは、第三者のことを考えないと作れません。お年寄りや子供、外国人が見てもわかるように考えて作る必要がある。人のために、人に理解してもらうために作品を作りたい、という人は、デザインに向いていると思います。万人にわかりやすく、という感覚は、デザインの大前提。二人ともそこを大事にしながら作品を作っているということは、とてもよいことだと思います。

●デザインを通じた地域貢献へ

高嶋: デザインを通じて一般の人に楽しんでもらうことは、一つの地域貢献です。授業を通してでも、デザインで人の役に立つことができるわけですが、皆さんは今後どのようなことをやってみたいですか？

猫塚: 茨城は魅力度ランキング最下位が続いていましたが、自分の作品を通じて茨城の魅力を伝えられればいいなと思います。

片岡: 今回はタペストリーを自分で最初から作りましたが、地域の人と協力して何かを作り上げるようなこともしてみたいですね。



「大型タペストリーコンペティション」優秀賞表彰式

授業研究会報告

本学では学内でアクティブラーニングなど新たな教育の手法を共有するという観点から、全専任教員を対象とした授業研究会を毎月1回実施しています。研究会では発表者が報告する授業実践の工夫や課題について、教員たちが活発な議論を交わしています。今回は第5回、第6回、第7回の研究会について報告します。

第5回(9月30日開催)

亀田 千里 准教授 「日本語リテラシー」における授業の工夫

報告では、発表者の担当科目「日本語リテラシー」における取り組みについて紹介した。「大学での学びに必要な日本語リテラシー(日本語運用能力)の育成には、優れたサンプルだけでなく、同じ立場にある学生の文章や発言に触れることも有意義である」という考えの下、授業ではグループ活動やペアワークを多用しており、報告ではその活動の一部を紹介した。また、本科目は3名の教員がチームを組んで担当していることから、チームで授業を進める際の工夫についての報告も行った。

梅本 佳子 助教 作文授業でのピア・レスポンスの取り組み

前期のアカデミック・ライティングの授業において取り組んだ、協働学習の作文学習活動であるピア・レスポンスについて、その実践と成果、反省点を報告した。ピア・レスポンスは欧米で発展した参加・討論型学習であるため、教師主導型の教育を受けてきた東アジアの学生には抵抗が大きいことが言われており、授業での導入に配慮・工夫が必要となった。また、導入した結果として、内容面での深い対話に至らないなどの課題は残ったが、学生が主体的に考える学習の入り口としては意義があったと思われる。

第6回(10月28日開催)

山野井 一夫 准教授 出席管理システムの紹介 - 出欠時間を減らして授業時間を増やす -

QRコードを使った出席管理システムの紹介を行った。本学では2020年度よりFelicaを使った学生証の読み取り方式が使えなくなった。そこで代替用として学生のスマホにQRコードを表示させてQRコードリーダーで読み取る方式を完成させたが、読み取りに時間がかかることから、現在は教師がQRコードを提示して学生がスマホでQRコードを読み取る方式に改良している。QRコードは不正防止のため、数秒で変更される。この方式は学生自身が出席回数を確認を行える他、学生の呼び出しや手動による出席追加、出席集計なども行うことができ、非常に有益である。

堀聖 司 助教 CG制作分野における授業改善の取り組み

視覚造形分野におけるコンピュータグラフィックス(CG)制作の授業実践で得られた知見に基づく内容改善の取り組み事例について説明を行った。まず、履修学生の持つ背景知識や志向の多様性について、技術修得の目的、技術活用の志向性、授業に対する姿勢といった観点から理解を試みた。そして、各学生が持つ知識・技術レベルに応じて達成感が得られ、さらなるステップアップ意欲が向上するような課題の設定を行った。情報収集やフリーツールの活用などを通して、より汎用性の高いメディアや情報リテラシー向上の重要性に対する学生の理解を深める取り組みについても報告を行った。

第7回(11月25日開催)

周亜芸 助教 対話的問題提起学習を取り入れた授業実践

大学の日本語の授業における「対話的問題提起学習」を用いた実践活動について、報告を行った。教師と学生、学生と学生とが対等な立場で対話を積み重ねながらライブチャートの作成や演劇式ワークショップなどを行うことにより、授業の活性化や学生の思考力の向上などの効果が得られた。また、対話の中での母語使用の有益性についても言及した。

※対話的問題提起学習…バウロ・フレイレが提唱した「問題提起型教育」(対話を通じて被抑圧者の非識字農民に被抑圧の原因を批判的に認識させ社会の変革に導いた手法)に対話性を加えたもの。日本語教育分野において岡崎敏雄、西川寿美らが提唱。

徐毅菁 助教 アクティブラーニングについての考えと取り組み

近年、アクティブラーニング(AL)が推奨されているが、全ての授業、あらゆる学生に適応するとはいえない。発表者はコンティンジェンシー理論を援用し、①個人の知識量、②個人の学習意欲、③履修者数を条件変数として、受講者の特性とAL効果の関係性について検討した。そしてその実践として、タイムリーなフィードバックを実現するClassroomの活用法や、学習意欲を喚起するゲームや視覚教材の導入及び事例の選定、授業中の学生の参加度を高める2色カード、板書式ケーススタディや輪読評価シートなど、授業での実践例を紹介した。



活発な議論を行う教員たち